



キャンパス・コンソーシアム函館

合同公開講座

函館学 2018

第2回講義

講義資料

ロシア人から見た函館と石川啄木、

与謝野晶子の短歌

スレイメノヴァ・アイーダ

ロシア極東連邦総合大学函館校准教授

日時:平成30年7月28日(土)

13:30~15:00



キャンパス・コンソーシアム函館

講師略歴

スレイメノヴァ・アイダ (Сулейменова Аида)

ロシア極東連邦総合大学函館校 准教授

1961年 ロシア・ウラジオストク市生まれ

1983年 極東国立総合大学科学部卒業

1983－1992年 ロシア科学アカデミー・太平洋バイオ・オーガニック化学の研究所研究員の後、1992年極東国立総合大学東洋学部日本語学科卒業。

2004年極東国立総合大学大学院卒業後、ロシア科学アカデミー世界文学研究所（研究テーマ：「近代ロマン主義的な詩における与謝野晶子の作品」）で学位を取得、同研究所准教授。2004－2016年極東連邦総合大学アジア東洋言語学科准教授、2016年3月より現職。

2005－2006年国際交流基金のフェローシップで、立命館大学文学部にて近代文学（近代短歌）を研究。2010－2011年国際日本文化研究センター

（NICHIBUNKEN、京都市）で「20世紀の東北アジアにおける近代短歌・俳句」の研究プロジェクトに参加。京都市民向け講義「亡命ロシア人が見た近代日本」を行った（2011年1月18日）。

研究発表

「堺市民における与謝野晶子の作品」『与謝野晶子クラブ』堺市、2001年、5号。

Свидание звёзд. Поэзия и жизнь Есано Акико (монография) (「星のあいびき 与謝野晶子の人生と作品」) 極東総合大学出版所、ウラジオストク、2003年。

The experience of literary monuments in honor of Japanese poets (日本の詩人に捧げる詩碑。歌碑・句碑の経験をめぐって) // Abstracts of the 4th workshop "Urban Futures" (School of Oriental and African Studies, University of London). London: May, 2005.

「与謝野寛・晶子とマトベエフ」『明治文芸講演会 会誌』京都、立命館大学、2005年。

Модернизация японской поэзии традиционных форм (монография). (「日本近代詩における短歌・俳句」) 極東総合大学出版所、ウラジオストク、2008年。

「与謝野晶子の作品におけるロシアとロシア人」『与謝野晶子クラブ』堺市、2008年、22号。

「与謝野夫妻と啄木 人生、作品の共通点と相違点をめぐる」『国際啄木学会』、2012年台北学会、30号。

Manchuria in the Travel Writings of Russian and Japanese Authors (from Yosano Akiko to Nikolay Baikov) (日本の与謝野晶子からロシアのニコライ・バイコフまでの紀行文における満州) // Program and Abstracts of the 19th Biennial Conference 2012 of Asian Studies Association of Australia (ASAA), "Knowing Asia: Asian Studies in an Asian Century", University of Western Sydney, July 11 – 13 2012.

講義内容

- ウラジオストクの出身の詩人たち（マトベエフ家 Николай Петрович Матвеев, Венедикт Матвеев (Март), Зоя Матвеева）と函館の関係
- 与謝野晶子との出会い、与謝野晶子とその歌碑
- 与謝野晶子とその作品におけるロシア女性のイメージ
- 近代短歌と現代ロシア人の受容（与謝野晶子、石川啄木の翻訳、歌人にささげるイベント（コンサート、短歌のコンクール等））
- 函館への私見（2年間の体験）

- 与謝野晶子との出会い、与謝野晶子とその歌碑

旅に立つ

いざ、天の日は我がために
 金の車をきしらせよ。
 颯風の羽は東より
 いざ、こころよく我を追へ。
 黄泉の底まで、泣きながら、
 頼む男を尋ねたる
 その昔にもえや劣る
 女の恋のせつなさよ。
 晶子や物に狂ふらん、
 燃える我が火を抱きながら、
 天がけりゆく、西へ行く
 巴里の君へ逢いに行く。

(1912年5月、『夏より秋へ』の部分)

- 近代短歌と現代ロシア人の受容 (与謝野晶子、石川啄木の翻訳、歌人にささげるイベント (コンサート、短歌のコンクール等))

- 与謝野晶子とその作品におけるロシア女性のイメージ
 浦潮の波止場に降りぬ水色のうすもの被き白き船より

「東京朝日」明治 45・5

春寒き浦じほに來と波だしぬ女王のごとくおもへる人も

「東京朝日」明治 45・5

我なければ露西亜少女來て肩なでぬアリヨル号¹の白き船室

「東京朝日」明治 45・5・15

水づきたる楊の枝もシベリアの裸足少女もあはれなりけれ (540)

シベリアに流されていく囚人の中の少女が著たるくらなゑ (543) 『夏より秋へ』

- 石川啄木の死についての短歌、
 白玉は黒きふくろに隠れたりわが啄木はあらずこの世に 『夏より秋へ』

- 啄木とロシア、ロシア文学、ロシア人のイメージ

みぞれふる

石狩の野の汽車によみし

ツルゲネエフの物語かな

五歳になる子に、何故ともなく、

ソニヤといふ露西亜名をつけて、

呼びてはよろこぶ。

¹ アリヨル号は敦賀港からウラジオストクへ向かった露西亜の旅客船。

ボロヂンといふ露西亜名が、
何故ともなく、
幾度も思ひ出さるる日なり。

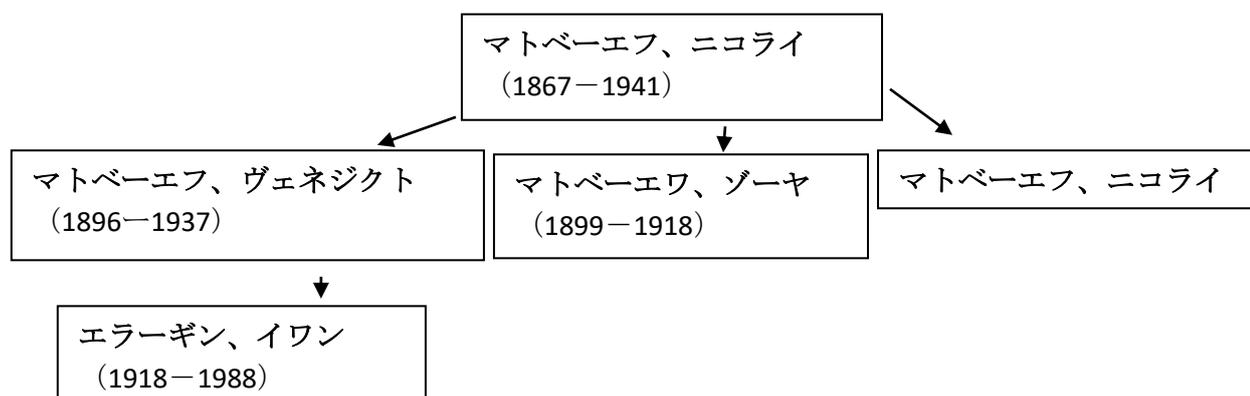
『一握の砂』より

- ウラジオストクの出身の詩人たち（マトヴェーエフ、またはマトベーエフ）と函館に
関係

マトベーエフ、ニコライーウラジオストクの最初の故郷研究者、ジャーナリスト；1867年に
一番最初に日本生まれのロシア人、「極東の自然と人々」紙の創立者。短歌、歌集、詩集の
翻訳家。自作の「短歌」の著者。12人の子供の父親。日本に亡命し、神戸にお墓が保存され
る。

マトベーエフ、ヴェネジクト（四番目の息子）、ーウラジオストク出身の未来主義者、詩人、
翻訳家；1918年に東京の与謝野夫妻の自宅に訪れた

マトベーエフ、ゾーヤ（長女）、ーウラジオストク出身の亡命人、与謝野晶子との出会いも
あった。



マトベーエフ・ヴェネジクトの「短歌」

「たまくらに鬢のひとすぢきれし音を小琴と聞きし春の夜の夢」という『みだれ髪』の第37
首の下記のような翻訳。

与謝野晶子より：

我は頭を手に垂れた。夢だ。夢で春を見ている。ピーンと張りすぎて弦が切れた。...あっ！
これは鬢の一つは切れた

(露文の翻訳)

- 函館への私見（2年間の体験）

ロシア文学を楽しむために、時々啄木の歌、日記を読んで、日ロ関係に出る啄木のイメージ
について考えること。函館やその周辺にある晶子、鉄幹、啄木の歌碑、詩碑を見に出かける
こと。